

岸和田藩政と七人庄屋の家格変動

萬代 悠

本稿は、和泉国岸和田藩の七人庄屋要家と、献金称誉政策を事例に、特権的村役人層の家格変動を検討するものである。これまでの研究は、村役人層や郷士層といった、集団の家格上昇運動に着目し、政治的に異なる各集団（各階層）間で生じた対立関係を明らかにしてきた。これに対し本稿では、個々の家の家格上昇運動に着目し、個々の家の献金による急激な家格上昇が、同一集団（階層）内部の対立関係を激化させる要因になりえたことを明らかにする。

これは、個々の家が急激な家格上昇を果たす際の問題点を検出し、献金称誉制度の弊害という観点から集団内対立を浮き彫りにする試みである。具体的には、献金による家格上昇が認められた文政三年以降、要源太夫がどのように家格上昇運動を展開したのか、献金による家格上昇（序列変動）は容易に行われたのかを検討した。

その結果、七人庄屋は、たとえ相応の献金額を提示したとしても、即座かつ無限定に格式を獲得できたわけではなかったことが明らかになった。要源太夫の家格上昇運動で問題とされたのは、他の七人庄屋を凌駕するような、急激な家格上昇を認めるか否かであった。藩は、献金による家格上昇を認めたとはいえ、急激な家格・席次変動が七人庄屋間の不和を招くのではないかと考えていた。由緒によって固定化していた序列を、献金によって急激に変動させれば、当然、他の七人庄屋からの反発が予想された。急激な家格上昇による嫉妬・反発の表出は、七人庄屋間に溝を作る要因になりえた。数名の七人庄屋が地方支配の中核を担う岸和田藩領だからこそ、彼らの不和は実務の遅滞化・非効率化に直結した。このように、献金による急激な家格上昇は、地方支配に支障を生じさせる可能性があった。とりわけ中・小藩領では、集団内部の経済的格差、それに基づく急激な家格上昇が集団内対立を激化させ、支配の実務に悪影響を与える可能性があったことを明らかにした。